

令和2年度

I 国 語

(9時00分～9時50分)

注 意

- 問題用紙は、6問で10ページです。
- 解答用紙は問題用紙の中にあります。
- 答えはすべて、解答用紙の所定の欄に、文、文字などで答えるもののほかは、ア、イ、…などの符号で記入しなさい。

福島県磐城第一高等学校

# 令和二年度 I 国語

## 一 次の各問いに答えなさい。

1 次のア～ウの傍線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

ア 卒業式で校歌を齊唱する。

イ 小犬にやさしく触れる。

ウ 医者が患者を診る。

2 次のア～ウの傍線部のひらがなを漢字に直しなさい。

ア 学校のきそくを守る。

イ しょうぐんの職に就き幕府を開く。

ウ 友達の年賀状がとどく。

3 行書で書かれた次の□の漢字を楷書で書いたとき、矢印で指した太

く書かれた部分は何画目か。数字で書きなさい。



## 二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

I ことばには決まった意味が厳然と存在していると考えている人が多い

と思う。これは、半分正しいが、半分正しくない。一つの単語に一つの

意味が対応していれば簡単で明瞭だが、<sup>②</sup>ことばの意味に「あそび」が

ないことばは使い勝手が悪くなる。「あそび」は緩さであるだけでない

く、ことばの柔軟性でもある。例えば、<sup>③</sup>「学校」ということばの意味

は、決まったものが一つあると思いがちだが、実際は使い方では意味は多

様である。「学校が休み」というときは「授業」のことであり、学校と

いう用務・業務として見ているが、「学校を建てる」では建築物、「学校

に着く」では場所、「学校を創設する」では<sup>a</sup>ソシキとして見ている。

II つまり、<sup>④</sup>ことばの意味は実際に使われた段になって確定的になるの

であって、使われる以前の段階では、限定されてい<sup>a</sup>ない。いわば、い

ろいろな意味になる可能性に満ちているのである。実際に文脈の中に位

置づけられてはじめて意味が絞<sup>しぼ</sup>りこまれていくのは、<sup>⑤</sup>A だけでない

く、文でも同じである。海外のある日本語の教科書には「太郎は、川

でサンマを釣りました」という例文が<sup>b</sup>ノ<sup>c</sup>っていたというが、この文は

形式上間違った日本語ではなく、意味も確実にわかる。しかし、サンマ

が川魚でないことは日本人にとっては常識だから、実際に<sup>⑥</sup>B にす

4 ひらがなは、漢字を簡略にして生まれた文字である。「ゆ」は左

の例のような過程を経て生まれた文字である。「留」という漢字から生まれた文字は何か。[A]に当てはまるひらがなを書きなさい。

例

由 ↓ ゆ ↓ ゆ

留 ↓ 留 ↓ [A]

5 次の傍線部の部分を正しい敬語に直すとき、最も適当なものを選択

肢の中から選びなさい。

校長先生は、絵画を見た。

ア 見ました

イ ご覧になった

ウ お目にかかった

エ 拝見しました

ると、おかしいと思う。

Ⅲ このように字面から形式的にわかる意味は、場面や文脈などの影響を受け、ない場合に限られる。字義どおりの意味とは、文脈を排除した意味なのである。しかし、実際のことばは、特定の場面で用いられ、なんらかの文脈を伴う。つまり、文の字義どおりの意味も、単語の辞書的な意味も、現実に使われていることばの意味ではなく、いわばショーケースに無菌状態のままホカンされていることばである。

Ⅳ これに対して、実際に用いることばは、それほど単純ではない。全く同じことばを発したとしても、誰が誰に言うか、どういう状況で、どういうことばを受けて言うかで、解釈は全く異なる。ややキョクタンな言い方をすれば、完全に同一の状況や場面は考えられない。同じ人物が発したことばでも、昨日と今日ではなんらかの違いがあるはずであり、すべての発話について二つとして同一のものは、ないことになる。つまり、実際に用いられることばの解釈は非常に多様であり、厳密に言うとなんらかの意味の違いがあるのである。

(加藤重広『その言い方が人を怒らせる』)

問1 傍線部aくdのカタカナを漢字で書きなさい。

問2 二重傍線部アくエの中で、品詞の異なるものを一つ選び記号で答えなさい。

問3 「ことば」と「意味」の関係について書かれた傍線部①～④の中から、同じ内容でないものを一つ選び記号で答えなさい。

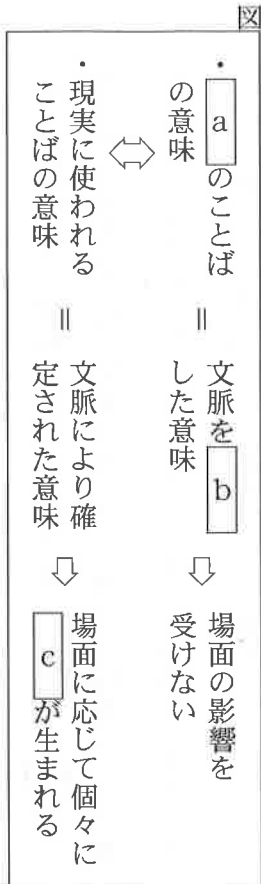
問4 空欄Aに入る適切なことばを、次の中から選び記号で答えなさい。  
ア 場面 イ 単語 ウ あそび エ 文脈

問5 「B」にする「が「聞く」という意味になるように、空欄Bに入る適切なことばを漢字一字で書きなさい。

問6 傍線部⑤について説明した次の文の空欄a・bに入る適切なことばを、それぞれⅡの段落から抜き出して書きなさい。ただし、aは十字以内のことば、bは五字以内のことばとする。

形式としては a ではないが、文脈の中に位置づけて考えると、  
b と感じる文の例。

問7 Ⅱ～Ⅳの段落を整理した次の図の空欄a～cに入る適切なことばを、それぞれ本文中から抜き出して書きなさい。ただし、aとcは五字のことば、bは漢字二字のことばとする。



※ 叡山の金堂：比叡山の延暦寺えんりゃくじにある仏堂。

※ 戸津坂本：比叡山のふもとにある地名。

※ 不動坂：延暦寺からふもとへ下る途中にある坂。

※ いろはの、あさきのくだり：いろはうたの中にある、「あさきゆめ  
みし」の部分。

問1 二重傍線部を、現代かなづかいで書きなさい。

問2 波線部ア～エの中で、その主語に当たるものが他と異なるものを一つ選び記号で答えなさい。

問3 比叡山の僧たちが傍線部①のようになったのは、一休和尚が具体的に何を書いたからか。本文から僧たちがどのような書を期待していたと考えられるかを含めて、三十字以内で書きなさい。

問4 次の中から、僧たちが傍線部②のようになった理由として最も適切なものを選び記号で答えなさい。

- ア 一休和尚の滑稽さがうわさ以上のもだったから。
- イ 一休和尚の気の短さが予想外のもだったから。
- ウ 一休和尚の臆病さがあきれるほどのものだったから。
- エ 一休和尚の律儀さが人並み以上のものだったから。

三 次の文章には、一 休和尚が比叡山の僧たちに、書を書いて

ほしいと頼まれたときのこと書かれている。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

何ほどなりと紙は御のぞみ次第とて、ひた物長々つぐほどに、※叡山の  
(僧たちは、どれほどでも紙はお望みのままです) (ひたすら長くつないだので)

金堂の前より 戸津坂本の人家まで、長々しくも紙をつぎければ、「さら  
(長々と紙をつないだところ) (では

ば筆をそめん。」とて墨たつぷりとふくませて、へたと紙へかきつけて、  
書き始めましょう) (へたと)

一さんかけて 不動坂まで一筋に引かれて、「よめるか法師たち。」とのた  
(ひと息に走って) (お引きになり) (おっ

たまへば、「いやなにもよめず。」といふ。また墨をつぎて、不動坂より  
しやる) (叫びなき

坂本まで、一筋に走り引きに引きて、「よめるか、よめるか。」とおめき

給へば、一山の法師たち肝をつぶし、「いやなにもよめず。」といへば  
(寺中の) (おどろいて

「これは、いろいろの、あさきのくだりにある、しの字なり。長々と書いて

よめやすきはこれなり。」と、のたまへば、皆人興をさまし、「さても聞  
(読みやすいものは) (期待はずれで) がっかりしたが (さて、前から

きをよびしよりおどけ人かな。」と一度に、どつと笑ひて興じけるとなり。  
聞いていた)

「一休ばなし」より)

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

違和感とはどういうものかを考える上で、まず直感について整理してみよう。辞書によれば、直感とは「推理や経験によらず、感覚的に物事の真相をとらえること」とある。

直感とは、反射的に「これだ！」とカクシンを持つ感覚だ。買い物に行つて、「この品物が自分を呼んでいたようだ。」という出会いをすることがある。たとえば陶器の茶碗。形といい、その適度な重さといい、肌合いいといい、すべてが手にしっくりとくる感触。これは直感的に来る。「これだよ、これ。まさにこういうものを求めていたんだよ。」とうれしくなる。

直感とはわかりやすい。直感とはポジティブだ。「これがいい。」とか「これが好き。」とか、すつきりはつきりしている。一方、一旦手に取つてみたものの、買わずに止めるようなこともある。一瞬心が動いたが、手にしてみたなら、いま一つ何かが違う。「ん？あれ？」という違和感が働く。

直感的に「これではない。」と感ずることもあるが、そういうときは最初から手に取つてみようと思わない。その前に峻別している。

違和感に引つかかるときは「悪くないんだけど、ちよつとなんか違う気がする……」「少なくともこういう感じではない。」といった消去法的な感覚の働き方をする。正体がわからないけれども、何かズレているというモヤモヤ感がある。白でも黒でもないグレーゾーンのような感じだ。

I の知らせ「や」胸騒ぎ」というのは、違和感のサインだ。何か

危険がありそうだというサインにもかかわらず、「でも、きっと大丈夫。」とそれを無視してしまうと、「まさかこんなことになるなんて……」ということが起きる。サインを感知してじっくり観察すれば、「ああ、やっぱりここが変だったんだ。」ということに思い当たる。違和感があるときには、状況を観察すべき動機が与えられているのだと思う。

ものを認識するとき、一つだけを見て「これだ。」と決めるのは思い込みであって、<sup>①</sup>判断ではない。物事から意味が生まれるとき、一つのもの何か特定の意味を持つのではなく、何かと何かとの差異が意味を生み出す—こう言ったのは構造主義の基礎を築いた、<sup>※</sup>フエルディナンド・ソシュールだ。差異がはっきりわかることによって、それぞれがどういう特徴を持ったものであるかが鮮明になる。だから、判断ができる。

違和感を察知して、<sup>②</sup>「一つずつこれは違うな。」「これも違うな。」と見抜いていくことにより、本当の意味での「これだ！」が見えてくる。このときどうやって見極めるかというと、頭の後ろのほうで引つかかるような感じを大切にす。それを基に、「この感じは何なんだろう?」「これと同じようなことが前にあったんじゃないかな。」と自分の意識下に「潜っていく。自分の中に集積されている総合的な「知」の海を、〈違和感センサー〉でサーチする。これまでの知識や経験、言語化できないような暗黙知も含んだそれらの蓄積、自分の経験知という<sup>※</sup>データベースの中を、自力で検索作業をする。

たとえば、仕事の電話を受けたとき、「その反応ってどうなの?」II

(齋藤孝<sup>さいとうたかし</sup> 『違和感のチカラ—最初の「あれ?」は案外正しい!』)

※一部省略等がある。

※ ポジティブ：積極的な様子。

※ 峻別：きびしく区別すること。

※ グレーゾーン：どちらとも判断がつかない、あいまいな領域。

※ フエルディナンド・ソシュール：スイスの言語学者。

※ データベース：情報を整理して蓄積したもの。

※ コミュニケート：意志や感情を伝えること。

問1 傍線部a～cのカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問2 二重傍線部A～Dのうちから感動詞を一つ選び記号で答えなさい。

問3 Iに当てはまる最も適当な漢字一字を書きなさい。

問4 傍線部①を筆者はどのようなことであると考えているか。最も適当なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 多くの人々とのコミュニケーションを参考としながら、自分の進むべき道を決めること。

イ 物事のそれぞれの違いを明らかにし、自分の経験や知識に照らし合わせる中で決定すること。

と感じたとする。そこで自分の過去の経験知と照らし合わせて「Ⅲ」といったデータがはじき出されると、用心できる。「イエスと言うつもりだったが、Ⅳ」といった判断ができる。

二、三の経験しかないのに経験知を引っぱり出そうとしてもそれは無理だ。たくさんの人と\*コミュニケートしてきた中で、つかんできた自分のココウの感覚。いままで大量に経験してきたことが自分の財産となつているから感じとれるようになっていく。データベースが充実しているほど、つまり照らし合わせる経験知のとき頼りになるのは自分だけだ。違和感を持つ部分は人によつてそれぞれ違うものなので、他者の評価を参考に推し量ることはできない。自分の内側の、が豊富であるほど、導き出されてきた判断の精度も高まる。このとき頼りになるのは自分だけだ。違和感を持つ部分は人によつてそれぞれ違うものなので、他者の評価を参考に推し量ることはできない。自分の内側の、これまでの感覚から検索するしかない。あるいは、違和感が湧いたから必ず排除しなければいけないというものでもない。

私は「直感」と「直観」の違いをこう考える。経験や推理を伴わない感覚「直感」に対して、経験やその推理、検証に基づいたものが「直観」である、と。そこにたどりつくために働くのが違和感だ。経験と直観というのは対立項のようにとらえられやすいが、そうではなくて、むしろ経験が多いと直観が正しく働き、直観がさらに経験知を豊かにする。相乗的に伸びていく。

ウ 自分の意識の下に隠れている総合的な知識の引き出しから、ぴつたりと合う事例を探すこと。

エ 推理や経験を頼りにせず、自分の瞬間的な感覚を大切に、物事の本質を選び取ること。

問5 傍線部②のようにして、結論を見い出すやり方を何というか。本文中から三字で書き出しなさい。

問6 Ⅱ、Ⅲ、Ⅳに当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選び記号で答えなさい。

ア 契約する前にもう少し考えたほうがいいかもしれない。

イ その仕事は、自分には向いていないだろう。

ウ こういう言い方をする人はこんな危険性がある。

エ この人、ちよつと感覚がズレてないか？

オ 仕事には、多少の危険がつきものである。

問7 傍線部③とあるが、筆者はどうしてそのように考えるのか。その理由を説明した次の文の 1、2 に当てはまる言葉を補いなさい。ただし、1 には、本文中から十五字以内で書き出し、2 には本文中の言葉を使って、二十字以上二十五字以内で書きなさい。(句読点も一字とする。)

「直観」とは、1 判断であり、2 から。

【五】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【この場面までのあらすじ】 バスケットボール部部長の岡島夏希は、一年前から膝ひざの痛みに苦しんでいたが、それをずっと隠して練習に励んできた。しかし、親友の平沼幸は、一昨日の練習で、自分の足を踏んで転倒した夏希の膝を見て、その異常に気づく。幸から相談を受けたスポーツドクターの鞆矢は、その様子から彼女の膝が限界にきていることを確信した。

「言うときには、言わなければなりません」

① もう逃げられないと夏希は思った。

「岡島さん。あなたの前十字鞆帯じんたいは機能を失っています。回復の見込みはありません。このままの状態じょうたいで運動を続ければ、やがては関節の変性を引き起こすことになるでしょう。そうなれば、今のような無理もきかなくなります。運動不能ということですよ」

鞆矢が夏希の目を見る。

「大切な試合に出られなくなるのが、そんなに怖いのですか」

「試合？ 試合はね、どうでもいいの。(A)」

夏希の返答に迷いはなかった。

楽しかったの、と夏希は笑った。

「すぐね、楽しかったの。部活がさ。よく大人の人が言うじゃない。学

手は黙っていました。しょうがないのでいたずらは困りますと注意したのですが、そうしたら受話器の向こうの女性が、しくしくと泣き出してしまいましたね」

「……幸？」

「ええ。それからようやく話を聞くことができたのです」

「なにやってんだらう、あの子は」

深くため息をついた夏希に、鞆矢が言った。

② 「迷いがあつたのですよ。平沼さんは、自分があなたの足を折ったと考えていましたからね。それを医者いしやに告げてしまえば、どうしても自分の罪を仲間に知られることになる」

「……それ、どういうこと」

「考えてもみてください。一昨日の転倒がもとで岡島さんが大会に出場できなくなったとしたら、誰だれが責められますか。いえ、みなさん口には出さないでしょうから、誰が責任を感じるかということですよ。それは足を引き抜くことであなただけを転倒させた、平沼さんですよ」

「違う！」

「はい。たしかに事実ではありません。しかしあのとときの平沼さんは、そう思うほかなかったのです」

鞆矢の言葉は夏希にとって予想外のものだった。そしてその言葉を頭のなかで丁寧ていねいに解きほぐすうちに、夏希は誰が悪いのかわかった。

自分だ。怪我を隠していた自分が悪いのだ。



生のところが一番楽しかったって。わたしは現役の高校生だけど、そう思えちゃったのよ。みんなと騒げる今が、一番楽しいんだらうなって。(B) 試合よりも、わたしは練習がしていかつたの。みんなと一緒に。(C) 夏希は踊り場の窓を見上げた。いつもの部活の風景が脳裏に浮かんでくる。夏希はいつの間にか泣いていた。上を向いているのに涙がこぼれ、光の雫が頬を伝った。

「怪我なんてわかつたら、わたしだけ仲間から外れなければならない。一年も休んだら、もうわたしたちの部活は終わってしまっている。(D)」  
「では、岡島さん」

鞆矢の抑えた声が耳に響いた。

「あなたたちの関係は、終わるのですか」

「それはさ、<sup>A</sup> まったく終わっちゃうわけじゃないけど、いろいろと変わるよね」

夏希は涙を手で拭った。

「本当にそう思いますか」

そう言った鞆矢は、じつは一昨日不思議なことがありまして、と続けた。「なんにも言わずに切れる。なんにも言わずに切れる。そういう電話が三度続けてクリニックにかかってきたのです」

「電話？」

「はい。いわゆる無言電話なのですが、対応する渡植くんも困っているようでしたので、四度目のときはわたしが受話器を取ったのです。やはり相

「平沼さんはですね、岡島さん。あなたが自分をかばってくれたと思っていたんですよ。足は大丈夫なんて嘘をついて」

③「……わたし、気づかなかつた」

収まりかけていた涙が、夏希の両眼に再び盛り上がってくる。クリニックに電話をしたときの幸の苦しみが、痛いくらいに実感できた。そう、それは自分と同じ苦しみだ。

「あなたの好意を受け入れ、黙っていることもできたのです。そうすれば、幸せな関係のなかに残ることができた。けれど平沼さんはわたしのところに電話をかけてきました。なぜだと思いますか？あなたへの罪悪感に苛まれたせいだと思いますか？」

夏希は首を横に振った。

「ええ、それは違うでしょう。平沼さんのなかでは、あなたの怪我を憂える心が、なにより強固でなにより大切だったのです」

④「<sup>4</sup> 頷くばかりでなにも言えない夏希の肩を、鞆矢が励ますように軽く叩いた。

⑤「どうでしょうか、岡島さん。もう少し平沼さんを、そしてほかのみなさんを信じてみては。あなたが一番大切に思ってたつなかりは、そんなに弱いものではありません」

断言する鞆矢に、夏希がもう一度深く頷いたとき、階下から足音が聞こえてきた。遠ざかるのではなく、音はだんだん近づいてくる。

踊り場に現れた短髪の少女は、階段に座る二人を見て、(I) ように動きを止めた。

「夏希、ちゃん」

慌てて夏希が顔を上げる。

「な、夏希ちゃん、目……」

その涙の意味するものを、幸は即座に悟ったようだった。眉が八の字に下がる。

「先生、やつぱり」

沈痛な声だった。鞆矢が黙って頷くと、幸はあつという間に泣き始めた。鞆矢が立ち上がり、夏希もその手を借りて立ち上がった。涙を拭いて幸と向き合う。

「ごめんね、幸」

熱っぽい感情は胸からとめどなく溢れていたが、夏希はそれしか言葉にすることができなかった。

けれど、もうひとこと。言うときには、言わなければならない。

「ありがとうね、幸」

（松樹剛史『スポーツドクター』）

問4 傍線部②「迷いがあったのですよ」とあるが、次の表は幸の迷い

について 内容を整理したものである。表の空欄を補う言葉を、

（Ⅰ）は四字、（Ⅱ）は 五字で、文中から抜き出して書きなさい。

幸の行動	予想される良い結果	予想される悪い結果
鞆矢に電話で相談する	夏希を怪我から救うことができる	夏希に怪我をさせたという（Ⅰ）をみんなに知られてしまう
誰にも相談しない	仲間との（Ⅱ）を保つことができる	心の中に夏希の怪我を心配する気持ちと罪悪感が残る

問5 傍線部③「……わたし、気づかなかった」とあるが、幸がとても

苦しんでいることに気づいていない夏希の態度をよく表している部分はどこか。文中から九字で抜き出して書きなさい。

問6 傍線部④「頷くばかりでなにも言えない」とあるが、これを説明し

たものとして、最も適当なものを次の中から選び記号で答えなさい。

ア 自分の嘘が幸を追いつめていたという事実をはじめて知らされて、後悔していると同時に自己嫌悪に陥っている。

イ 幸に対して申し訳ないという気持ちと、幸の自分に対する思いへの感謝の気持ちとで胸がいっぱいになっている。

問1 文中の（I）に入る語として、最も過当なものを次の中から  
選び記号で答えなさい。

ア 泣きつく イ ふらつく ウ 凍りつく エ さびつく

問2 文中には次の一文が抜けている。この一文が入る最も適当な箇所  
を、文中の（A）～（D）から一つ選び記号で答えなさい。

そのことに比べたら、一人で膝の不安と闘うことなんて、なんにも  
辛くなかった。

問3 傍線部④「もう逃げられない」とあるが、この場合、夏希にとつ

て「逃げられない」とはどういうことか。最も適当なものを次の中  
から選び記号で答えなさい。

ア 怪我を隠してみんなと一緒に練習することで怪我の不安を忘れ  
ること。

イ 怪我を隠してみんなと一緒に練習しても膝の痛みが解消されな  
いこと。

ウ 怪我をしているという事実をみんなに隠し続けなければならな  
いこと。

エ 怪我をしているという事実を正面から向き合わなければならな  
いこと。

ウ 靱矢の自分の怪我に対する診断に衝撃を受けたために、これか  
らどうしてよいのか分からずにぼう然としている。

エ 靱矢がじつは幸に頼まれて自分を診察していたことに気づいて、  
幸が余計なことをしてくれたと腹を立てている。

問7 傍線部⑤「もう少し平沼さんを、そしてほかのみなさんを信じて  
みては」とあるが具体的にはどうするか。二十五字以内で説明しな  
さい。

## 六 作文

あなたにとって、「よい友人」とはどのような人ですか。これまでの生  
活の中で感じたことや経験を踏まえて、一六〇字以上二〇〇字以内で書  
きなさい。